



信友会会報

2010年2月

<<1月例会より>>

信友会 1月例会は、「旧約聖書における危機の時代に学ぶ」シリーズの第3回として「南ユダの興亡の歴史に見る現代社会の縮図」と題して森澤弘雅兄にお話をいただきました。なぜ彼らは滅亡の道を辿ったのか、その後ユダ民族はどのような歴史的変遷を遂げたのかなど、謎多い聖書の記述を通して現代の私たちへの示唆するものを探ります。(出席者 30名)

信友会 1月例会

「南ユダ興亡の歴史に見る現代社会の縮図」

信友会 森澤 弘雅

1. ユダ王国末期からバビロン捕囚まで

紀元前 11 世紀末期、イスラエル王国が統一され初代王サウルの後ダビデ、ソロモンと続きましたが、ソロモンの死後、前 931 年統一王国は分裂して南ユダと北イスラエルに分かれました。両国とも歴代王はじめ多くの民も、かつてモーセが神と約束した正しい教えを守らず、自分たちの欲望を偶像に託して礼拝するといったいかがわしい歴史を刻んで神の罰を受け、その結果ついに前 722 ~ 1 年北イスラエルはアッシリアによって滅ぼされます。



それから 100 年以上生き残った南ユダをはじめ、西アジア主要国はアッシリアの属国となっておりました。前 627 年アッシリア末期の王アッシュルバニバルが死去して 3 人の弱体な王が跡を継ぎますが分裂が始まり、求心力を失った末、新興の大国バビロニア帝国(ネブカドネツアル 2 世)に攻められ、前 612 年首都ニネベが陥落して滅亡。

当時南ユダの王はヨシア(即位前 640 年)。「申命記革命」を実行した善王でした。ヨシア王は、アッシリアによって滅ぼされた北イスラエルの領土を獲得しました。しかし、空白となっていたシリアやパレスチナ(ペリシテ)の領域は、勢力を盛り返したエジプトが侵攻しようとして北上。エジプトのファラオ・ネコ 2 世は、アッシリアの残党を援助し

ながら、シリア・パレスチナを支配しようとしておりました。

ヨシア王は、新バビロニアと手を組んで、北上するエジプト軍をメギトで迎え撃ちますが逆に南ユダ軍は敗走してヨシア王は戦死(前 609 年)。エジプト軍はさらにバビロニアと戦うために北上を続けましたが形勢悪く途中で断念。ここでヨシア王の跡を受け継いだ次男のヨアハズは、帰国途上にあつたネコ 2 世に捕らわれてエジプトに連行されそこで死にます。

ネコ 2 世はヨアハズに代えてエジプトに忠誠を示した兄ヨヤキムを王位に就けますが、多額の朝貢を要求され住民の重い税負担を強いることとなります。

一方ネブカドネツアルは前 605 年、ユーフラテス川中流のカルケミシュでエジプト軍を迎えて勝利を収め、その勢いでシリア・パレスチナ地方の支配権を獲得します。

エジプト側についていたヨヤキムは、今度はバビロニアに服従を強いられます。しかし、エジプト国境まで進んでいたバビロニア軍がエジプト軍に痛手を受けて敗走すると、ヨヤキムは再度バビロニアに反旗を翻しま

した（前 601 年）。しかしネブカドネツアルは最後には西アジアに大きく領土を確保し、ヨヤキムが死んで息子ヨヤキンが王位に就いた前 598 年、軍隊をエルサレムに向けてこれを占領、ヨヤキンをはじめ主な指導者、職人たち約 1 万人を翌前 597 年バビロニアに連行して行ったのです。これが第 1 次バビロン捕囚であります。

ネブカドネツアルは、存続しているユダ王国の王位にヨヤキンの叔父ゼデキヤを就けます。ゼデキヤも結局ユダの民衆の声に押されてバビロニアへの忠誠を拒絶し、エジプトに頼って抗戦態勢をしきみます。怒ったネブカドネツアルはユダ王国の諸都市を次々に攻め、最後は聖都エルサレムを包囲。ユダ側は 3 年間抵抗しましたが、前 587 年ついにエルサレムも陥落します。

バビロニア軍はエルサレムの王宮や神殿、主要な建物を次々に破壊。ここでも多くの国民が連行されて強制労働者として捕囚されることとなります。これが第 2 次バビロン捕囚です。

2. ユダ歴代王たちの功罪

捕囚当時の預言者はエレミヤとエゼキエル。2 人が随所で強調するのは、神に選ばれたヤコブ・イスラエルの民が神に与えられた恩寵を忘れ、唯一の神への礼拝を守らずに自分たちの欲望の象徴である偶像を刻んで崇拜し、安息日には一切の仕事から手を休めて神を賛美するといった約束も忘れていた罪を指摘し、その罪は深く重いことを警告していることです。

遡って、主な王たちの事跡を列王記と歴代誌などから振り返ってみます。

初代王レハブアム（前 931～914）は、北初代王ヤロブアム 1 世とたびたび交戦し、さらにエジプト王シシヤク 1 世からも攻められ、ソロモンが蓄えた多くの宝物を貢ぎ、領土の 3 分の 2 をも失います。王も国民の多くも主の目に悪とされることを行い、すでにこのときから南ユダに主の罰が予測されております。

2 代目王アビヤム（歴代誌ではアビヤと表示）も、ヤロブアムと戦い北の領土からベテルと周辺の部落を奪回。彼もまた父が犯したすべての罪を犯します。

3 代目王アサは、父祖ダビデと同じように主の目にかなう正しいことを行い、先祖たちが造った憎むべき偶像をすべて取り除きます。北王バシャと争いが絶えず、その間アサはダマスコに拠点を置くアラム王ベン・ハダドと同盟を結び、主の神殿と王宮の宝物庫から金と銀を贈り、主を頼みとしなかったため、今後ユダには戦争が続くと予言されます（歴代誌下 16-9）。

4 代目王ヨシャハト（前 871～848）シリア軍を相手とするラモト・ギレアドの戦いにおいて北王アハブと同盟を結び、辛うじてユダ国の平和を保ちます。

5 代目王ヨラムの息子アハズヤの治世はわずか 1 年。その母親アタルヤは北王オムリの孫娘、すなわち北最悪の王アハブとイゼベルの娘とされる。アハズヤもアタルヤの悪い勧めによりアハブと同じ主の目に悪とされる行いをします。

北王の縁戚に当たるアタルヤは息子アハズヤが死ぬと、直ちにユダ王族をすべて滅ぼそうとして一族を殺戮、自ら王位に就きます（前 840～835）。この間幼いヨアシュだけは祭司ヨヤダにより宮殿に 6 年間かくまわれて 7 年目にヨヤダに油を注がれて王位に就き（前 835～796）、アタルヤは軍を指揮する百人隊長らによって殺されます（列王記下 11-16。この物語はフランスの劇作家ラシーヌの悲劇「アタリー」でも知られる）。

ヨアシュはいったん途切れたダビデ王朝を復活させ、アタルヤが信奉していたバール神殿を破壊し新しい神殿を復興させようとします。しかし、聖なる献金（税金）の帳簿を調べると、多くはアタルヤ自身とバール神殿への捧げ者に使われており、また利欲に目のくらんだ司祭たち（現代の政治家や官僚たちに相当）の蓄財に用いられていたようです。結局、神殿の修復が完成したのはヨアシュ即位 23 年を経てからでした（列王記下 12-7）。

そのヨアシュも、反逆の兵士たちによって殺害されます。ここから、南ユダの歴史はまっしぐらに転落に向かいます（列王記下 12-21）。

ヨアシュの息子アマツヤは父の仇を討つや、北王ヨアシュ（南ユダのヨアシュとは別人）に挑戦するもベト・シメシュの戦いで大敗を喫し、多額の貢物とエルサレム城壁の破壊という高い代償を支払うのでした。アマツヤも家臣に殺害され、その息子がウジヤ。

神の罰を受けて皮膚病を患ったウジヤ王の統治を引き継いだのが 11 代目王ヨタム（前 739～734）。エルサレム神殿の上の門を建て、ユダの山地に町を築き、城壁や塔を築いたとされ、当時エルサレムの中央権力がユダ全域に及んだことが記されております（歴代誌下 27-3）。

3. 預言者イザヤとヒゼキヤ王

ヨタムの息子アハズの治世(前734~728)に、エルサレムはダマスコのレツイン王と北イスラエルのペカ王連合軍に侵攻されます。それはアッシリア王ティグラト・ピレセル3世に対抗する同盟にアハズを参加させるためでした(シリア・エフライム戦争)。しかしアハズは逆にティグラト・ピレセル3世に使者を送り援軍を依頼。アッシリア王はその願いを聞き入れてアラムの首都ダマスコに攻め入りレツインを殺します。その返礼としてアハズはダマスコの祭壇とそっくり同じ祭壇をエルサレムに築き、多くの捧げものをします(列王記下16-10)。アハズ王も神の定めた祭壇ではなく、異教の祭壇を祀る罪を犯したのです。

力を蓄えたアッシリア王センナケリブは朝貢を求めてユダに侵入。このときこれを迎え撃ったのがアハズ王の後継者ヒゼキヤでした。

ヒゼキヤが即位した前721年当時、北イスラエルはサルゴン5世率いるアッシリア軍の攻撃により首都サムリアが陥落、北王国は滅亡します。

その間ヒゼキヤは深い信仰によりレビ人たちを通して神殿を清め神殿礼拝を回復させます。さらにイスラエル、ユダ全域に過越し祭を復活させます。

センナケリブを迎え撃つヒゼキヤは、預言者イザヤに窮状を訴えます(列王記下18-36、イザヤ書36-21)。すると主はイザヤの口を通して伝えます。「わが主なる神はこう言われた。お前たちは立ち帰って、静かにしていれば救われる。安らかに信頼していることにこそ力がある、と」(イザヤ書30-15)。この静けさとは、単に手をこまねいて傍観することではなく、神のみを信ずることからくる静けさです。

ヒゼキヤが重い病に冒され死にかけていて、イザヤも「あなたは死ぬことになっている」(イザヤ書38-1)と告げにきたとき、ヒゼキヤは涙を流して大いに泣きます。しかし主はヒゼキヤの祈りを聞き入れ、寿命を15年延ばしてやるのです。ヒゼキヤの祈り「人生の半ばにあって行かねばならないのか。陰府(よみ)の門に残る齢(よわい)をゆだねるのか(同38-10)、悲痛ですね。

ここでヒゼキヤは取り返しのつかない罪を犯します。バビロンから見舞いの使いが訪れてきたとき、ヒゼキヤは喜んで宝物庫を開いて自慢げに全部見せてしまうのです。それほど、物的な財産を誇らねばならない人間の欲望、人間の心の弱さをさらけ出すわけです。主はイザヤを通して「王宮にあるものはことごとくバビロンに運び去られ、あなたから生まれた息子の中にはバビロンに連れて行かれて宦官にされる者もいる」(列王記下20-17)と告げられます。



しかし、ヒゼキヤは「主のお言葉はありがたい」が、自分の在世中は平和と安定が続くだろうと楽観視しておりました。バビロン捕囚が起こったのはそれから100年も後でしたが。

ユダヤが滅びるにはまだ間がありました。しかしすでにイザヤは社会のゆがみを見据えていました。ゆがみを引き起こす原因は王や人民のおごりであり、高ぶりであると(イザヤ書3-16~24)。このおごり、高ぶりは神に対する傲慢さを指します。浅はかな人間の思いつきに過ぎない価値観で神の思いをないがしろにしてしまう。このことが常の世でも平和を乱し、戦乱を引き寄せ、貧困や災害を醸成し、テロを誘発します。現代の国際社会にも合い通じております。

「第二イザヤ書」(40~55章)が生み出されたのは、バビロン捕囚から40余年後、ペルシア王キュロス2世によってバビロンが亡ぼされ、イスラエルの民が帰還を許される時期に当たります。

この中では、イスラエルの神こそ唯一の神であることが強調されております。

「慰めよ、わたしの民を慰めよ、とあなたたちの神は言われる」(イザヤ書40-1)。ヘンデル『メサイア』第2曲テノールの美しいレシタティーボに歌われている句ですね。シオンすなわちエルサレムに向かっての最初の喜びの訪れが語られます。捕囚の民の奇跡的な帰還の預言が第二イザヤの中心テーマです。

ここでの神は、エルサレムの神を越えて、広く世界的な視野で語られます。それは今日の私たちの神イエス・キリストへの賛歌でもあります。

4．バビロン捕囚の意味 預言者エゼキエルの苦悩

「バビロンの流れのほとりに座り、シオンを思って、わたしたちは泣いた。」

詩篇 137 の冒頭の詩です。強制労働を強いられ、苦しみの中にあっても唯一の神を忘れることなく、この苦しみとは何か、なぜ苦しめられるのか、どうすれば救われるのか。捕囚の民はそのことを問い続けました。

捕囚の民と共にバビロンに連れられたエゼキエルは、ユーフラテス川の支流の運河ケバル川で主の顕現を受けて預言活動を始めます。それも困難と迫害のさなかから出発しておりました。

捕囚とは、イスラエルが犯してきた過去の深い罪に対する神の罰であり試練でした。しかし、単なる試練ではなく、それは新しいイスラエルの創造、すなわち本当の平和を享受できる社会の実現という積極的な未来指向でした。

預言者エゼキエルは、このことを民に知らせるために神の巻物を食べて胃に治めます(エゼキエル書 2 9~)。それは、民と共に苦しみ、悲哀を味わって捕囚の民に希望を与えるためでした。

エゼキエルの在世中にエルサレム神殿の破壊が伝えられます(同 33 21)。

エゼキエルは、イスラエルの背信は遠い昔エジプトにいる時から始まっていることを訴えます。エジプトで厳しい労役を課せられていたイスラエルの民を、神はモーセを通して救い、荒れ野に導きましたが、そこでも彼らは神の定めた掟に背いたため、乳と蜜の流れる美しいカナン之地へとたどり着くのに多くの歳月を要しました(同 20 - 10~24)。

しかしイスラエルの歴史は、救いと解放を目的とする歴史であることをエゼキエルは説きます。それは私たちの歴史でもあるのです。罪を犯し続ける私たち。しかし、神の救いと許しは常に私たちに向けられているのです。ただ、私たちはそのことに気づきません。バビロン捕囚、エルサレムの破壊の向こうに希望が残されていることに多くの人民は気づかず、「反逆の民」となってエゼキエルを苦しめます。平和を回復するためと称して戦闘行為を選ぶ現在の大国の為政者たちの論理と軌を一にしております。

「わたしが主であることを知るようになる。」この言葉はエゼキエル書に 50 回以上用いられております。この意味は、主であることを知れば知るほど「愛が深まる」ということです。エゼキエルが絶えず強調して訴えるのは、神は「わが名」のために働きかけていることです。神が神であることの本質を訴え、人間と関わる唯一で誠実な神であること、その救いは「愛」であることを強調するのです。

そのために私たちにも「罪の自覚」が必要なのです。そこに神の愛を見、愛を知ることができるからです。